

地球と呼ぶ星でありふれすぎている職業で世界最強……？

Doelman

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

関東圏に存在するとある高校の卒業生による同窓会が開かれていた。そこで聞いた衝撃の真実とその後起こる現在科学では説明かけにくい現象に巻き込まれ、異世界トータスへ飛ばされてしまう。

一方の地球では転移に巻き込まれた彼らを救出するためにありとあらゆる策を講じる。当事国の日本とその周辺はどのようにして救うのか。

地球VS異世界 どちらが勝手で正義となり得るのか

# 目次

片道切符

プロローグ〈前編〉	1
プロローグ後編	9
異世界トータス	15
ステータスプレート	24
ゲームチェンジャー	37



## 片道切符

## プロローグ〈前編〉

2026年10月24日

都内某所

とある立食式のファミレスチェーン店にて関東圏に存在する高校の卒業生による同窓会が開かれていた。皆思い思いに喋り時に食事に夢中になり誰かの会話を耳を傾けたりしていた。彼らのまとまりの区分としては通っていた高校の二年次のクラスメイトである。ここだけを切り取ってみれば楽しそうな雰囲気同窓会であっただろう。だが、この後起こる大騒動に巻き込まれることになるとは現時点では誰も思っていなかった……………。

「そういえば、カオリンとシズシズって結婚してたんだね。鈴たちにはなんの連絡もなかったからさ」

そう言ったのは谷口 鈴。高校時代にはトップカーストグループにいた人物だ。なぜ彼女がその問いをしたかというのは彼女自身とその愛称で呼んでいる人物二人と高校卒業後に進学した学校の規律により連絡が一切取れなかったためのような活躍をしているか一切検討が付かなかったためである。だからこうしてこの日の同窓会に呼ぶことが出来、なおかつ疎遠だった二人に聞くのは当然である。

「確かに二人の左手の薬指に指輪が二つあるね。婚約指輪と結婚指輪、どっちも綺麗だし良いね。白崎さんの婚約指輪がピンクゴールド、八重樫さんの婚約指輪はパープル。結婚指輪はどちらもホワイトゴールドだね」

その話題に食い付いたのは中村 恵里。谷口と同じくトップカーストグループの一人であり指輪を見ていた。女性にとつては一種の憧れのようなものであるため少しうっとりしながらそれを見ている。因みに彼女たちは結婚はおろか番となるような相手がいないため現在絶賛募集中( )である。

「仕方がないのよ、貴女たちも知っているでしょう？私が就職した職業が職業だから友人に連絡があまり出来ないの。報告が遅れた件については許してくれる？」

苦笑しつつそう答えたのは、シズシズ、八重樫さんと呼ばれた女性。名前は八重樫 雫。彼女もまたトップカーストグループで通っていた高校では二大女神の一角として知られ義妹シウルシスターなる組織が存在するほどである。因みに今の職業ではそんなものはない。

「ごめんね鈴ちゃん、私も向こうに行つてから色々立て込んで番号も変えてたから連絡がつかなかったと思うの。恵里ちゃんから連絡もらったときに余裕があったからここに來れたの。だから色々ごめんね？」

落ち込んだような顔をして謝っているのは《旧姓》白崎 香織。彼女もまた

トップカーストグループで二大女神の一角で男子、女子共に好かれていた人物である。因みに普通にいった言葉であるが一部引っ掛かるところがあるのはご存じだろうか。「ねえ、エリリン。シズシズはともかくなんでカオリンの番号知ってるの?」

そう、普通であれば番号の変更については友人らに説明する事由はある。しかし立て込んでいたと言っていたためこの時点において電話番号等は知らないはずである。例外として幼馴染である八重樫に連絡していた点は領けるが疎遠になっていた彼女が知っていることにおかしな点を感じることにしては何ら不思議ではないのである。更にここに別角度での追撃が掛かる。

「えっ、恵里ちゃん私が結婚したことはとっくに知ってるはずだよ? だって私説明したもん」

「どういうこと、エリリン?」

フイツ

「あー、そうだね。知っているのは私たちだけよ香織。あともう二人知ってるぐらいよ、貴女が結婚したことは」

「……確かに言っただけだね。忙しかったし」

「確かにそうね」

谷口にしてみれば八重樫が進んだ道については知っているため連絡が難しい



ことについては承知しているがなぜ白崎が八重樫と同じように賛同しているのかが不思議で仕方がなかった。だから核心を突くことを聞いてみた。

「……ねえカオリン。職業は？」

「軍医だよ」

「へっ!?!ふっ服飾関係の仕事に就きたいって聞いてたけど全然違うじゃん!?!」

「……鈴。香織は夫に着いていったらそうだったのよ」

「イミワカンナインデスガ」

「僕だって初めて見て聞いたときは啞然としたよ。まさかあそこまで突撃するとは思わなかったよ……」

「じゃあ二人とも知ってるの？」

「うん」

「ええ」

「因みに聞いても？」

「アメリカ海軍」

「ごめんもう一度言って」

「アメリカ海軍」

「ドユコト？」

「本人に聞いて、ただし死なないでね」

片方は目が濁りもう片方は呆れ100%である。これには

「お、おう」

と返すしかなかった。とはいってもあの白崎を落とした男性が気になるのも事実。なので聞いた。

「カオリンの旦那さんで誰？鈴が知ってる人？」

「うん、そうだよ！」

朗らかにそして嬉しそうな顔をして笑みを浮かべるそれは酔いのせいもあるだろうが美しく綺麗に見えた。男性であろうが女性であろうが一瞬見惚れてしまい一時的に店内が静まり返ったほどである。ホールにいたウェイターも一瞬立ち止まったほどである。ついでに水を指すようなことを言えば顔を見ていない厨房にいるシェフやホールスタッフらは静まり返ったことに怪訝な顔をするものの特に興味を示さずに黙々と作業の再開を行っている。

気を取り直して  
閑話休題

「それで肝心の相手は誰？ 鈴たちが知っている人だつて言つてたけど」

「じゃあちよつと待つててね？」

スタタタタタ、と擬音が聴こえるような軽快な足捌きでとある人物に向かつていく。その先に見えた三人の男性の内二人……清水と遠藤……？ が大きく眼を見開いている。そして白崎は最後の一人の男性に向かつて突撃ハグをかます。

「ハジメくん（\*・▽・\*）」

「おわっ！ どうしたの香織さん？」

「（\*・▽・）♪エヘヘダメだった？」

「ううん（—ω—）。大丈夫だよ」

今、カオリンは南雲くんのことをハジメくんと呼んだ。対する南雲くんもカオリンのことを香織さんと呼んだ。高校時代にはどちらも名字で呼んでいたことは覚えていたが今この瞬間にそれは崩れ去った。はっ？ えっ？

二人つてそういうこと？ と谷口を筆頭とした皆はある一つの確実とした結論が頭の中で出ていたがそれでも聞く必要があつた。

「ねえカオリン、旦那さんつて……」

「あつそうだね。じゃあ改めて紹介するね？ 南雲ハジメの妻の南雲香織です（\*・▽・



# プロローグ後編

「「「「「はあああああああ!?!????」」」」」

驚愕と怒号に悲鳴と色んな感情がない交ぜになった声が轟き元々知っていた八重樫、中村、清水、遠藤は即座に耳を塞ぎ彼らのクラスの社会科を担当していた教諭 籾賀 愛子 は驚きの表情を浮かべながらも同じく耳を塞いでいた。声を上げた彼らはこの後店長より口頭での嚴重注意を受けた。因みに他の人たちから注意がなかったのはこの店舗を丸々借りきっているためである。

## 閑話休題

この騒動の原因となった当事者は相も変わらず桃色の空間を放出しているが、結婚の経緯はおろか付き合っていたことについても誰一人〇として知らなかったためこの場においてその事を追求されていた。

「えっ、南雲っていつ結婚してたんだ？そんな素振り一度もなかったけど」

「9年くらい前だね。香織さんとは21でつまり学生結婚だったからそんなもんだね」

「南雲って就職、進学どっちだ？」

「進学で大学はバージニア工科大学。親から日本の外での技術を身に付けてこいって言われてね、高校卒業と同時に飛んだ形だね」

「確かそこって結構有名なところじゃないのか？」

「全米の大学の中で高評価の所だし工業系に絞ればトップクラスなんだよね。父さんの従兄の紹介もあって親の影響でコンピューター系統の学部に入ったんだ」

「へー、結構頭いいのな」

「着いていくのには必死だったよ。理数系は大丈夫だったけど国語系はなんとも。なんとか追い付こうと勉強していったら英語、ドイツ語、ロシア語、ポルトガル語、ラテン語、ギリシャ語が読み書き聴きができるようになったね」

「マルチリンガルかよ、頭おかしいんじゃないの？」

「うーん色々やってたらしいの間にかって感じだからなんとも言えないね」

「前々からどこかずれていると思っただけ俺らとは違った感じで観てたんだな」

「社会の見方ってこと？」

皆、一斉に叫び声を上げたもののハジメと香織が結婚していたことについては

多数が納得していた。というのも二年次の辺りから猛アタックを仕掛けていたことは周知の事実であり加えて当時はハジメの方がのらりくらりと否定も肯定もしておらず、生き方が 趣味の合間に人生 であつたためその考え方が受け入れられなかつたという部分がある。しかしその部分を抜き取り客観的な視点から見ても

香織がハジメに好意を抱いていたのは紛れもない事実であり振り返つてみれば数々の言動はそれに裏付けられるものであつたことを証明している。昔は否定的であつたものの今、彼らは既に成人しており社会人として約10年現在進行形で波に揉まれ続けているため、他人の色恋沙汰に口を挟む必要は何一つ無いのであり結果として祝福はしていた。だがこの報告に対して祝福ではなく一方的な決めつけと否定をもつて詰るものがいた。

「は？南雲と香織が結婚？そんなことは絶対あり得ない。そもそも優しきで南雲を気にかけていただろう。はっ、待てよ。そもそもそんな気がないのに奴のとこに行きあまつさえ香織を落とした。つまり脅迫や洗脳若しくは弱味を握つて強制的に結婚したにすぎない。南雲貴様、香織に何をした!!」

沈黙による静寂。元クラスメイトは勿論呼ばれた教諭、果てはこの店舗のホームスタッフに厨房にいるシェフに至る殆どの人間が静寂を作つた元凶を異物を見る目で声を放つた男を歓迎した。 天之河 光輝 高校時代と相も変わらず、いや更に悪

化したご都合主義者である。何故ここままでになったのかと言えば彼は持ち前の高スペックを生かしそこそ有名な大学に入学したものの、狭いコミュニティの中で彼を持ち上げるような人間が付き纏っていった結果としてこのような人格が形成されていった。また環境要因として大学側がそもそも生徒が大きな事件を起こしたりニュースに取り上げられるようなことをしない限り生徒個人を尊重するため基本的には不干渉の立場であり教師も教師でその性格をきつちり見抜くことができなかったという側面がある。そのため理想的な性善説が彼の中で極まり表面のみの解決を図ることが常態化していったということである。更に挫折らしい挫折も知らず彼の性格を否定する人物がいなかった要因も含めてこのような人格になったのである。

「ねえ今のどういう意味か説明してくれるかな？」

「ああいいだろう。さっきも言ったとおり高校時代君は香織に甘えていた。それだけであれば問題はなかった。だが君はそれだけに飽きたらまず自分の思い通りにしようと香織の弱味を握りそこにつけ込んだ。これ以上否定しようがないくらいに」

「うんまずその前提条件が間違ってるね。そもそも二年次の時点で香織さんが何故僕に構うのかが理解できなかったしその時は香織さんに興味がなかった。けれど僕に構う理由を聴き加えて自然に僕が告白するように誘導されていった。その時点で胃袋を捕まれたけど。けど僕は甘えていたこともないし天之河君の言うように弱味を握った



り洗脳なんかしていない。もしそうなら僕と香織さんは結婚していないし、その前に刑務所の中で刑罰を受けてるか執行猶予をつけられて観察されてるか之どころかだよ。そのときの裁判所がどういう判断を下すかは知らないけど。つまり天之河君の考えていることには矛盾が生じているけどその部分について反論はある？」

「……君は香織に甘えていただけだ!!南雲を好きであることは間違いだ!!絶対に何かしたはずだ答えろ!!」

「……好きであることは証明はこの結婚指輪だけだ」

「脅迫させられて付けられているだけだろう!!それ以外に何かあるんだ!!」

「それ以外にあるからこうして言っているんだ。それとも君は僕たちが結婚してはいけない理由があるの?」

「それは……」

この会話で鬱憤が溜まっていたのだろう。南雲 ハジメ は冷えきった眼でクラスメイトが聞いたことがない口調で次を放った。

「理由がないならもう口を開くな、天之河 光輝」

ギリイ

両者は睨み合い一触即発の空気が流れたところに視界外でなにかが光った。光った方向―店舗の床―を見て硬直した。ファンタジーものの漫画やアニメで見られ

るような幾何学模様が床一面に広がっていた。一早く我に返った 籐賀 愛子は悲鳴に近い声で叫んだ。

「皆さん逃げて!!」

だが一手遅く一瞬強烈に発光したのちそこにいた人間は欠き消えた。悲鳴を聴き駆けつけたホールスタッフとシェフ、そして店長が見たのはもぬけの殻となった店内だった。食事のあとが残ったまま。

そして警察に通報が入り状況見聞が行われるなか聞き付けた関東圏の報道局が一斉にこの事を伝えた。東京の店舗にいた全客の一斉神隠し事件として。

だがこの事件をきっかけに地球をも巻き込む壮大な戦争へと移り変わること  
をまだこのときは誰も知らなかった……………。

## 異世界トータス

強烈な閃光を一瞬浴び一時的に視界が奪われる。馴れるまでには数十秒の時を要したがそれで十分だろう。ようやく回復し状況を確認する。呼吸 良好。五感正常。衣服 変わり無し。体調 いつも通り。身体の感覚 異常は診られない。周辺あの店舗にいた旧クラスメイトの安否確認 良し。ただし見たことがない空間にいるという認識があるだけ。ここでようやく南雲ハジメは状況把握をすることができた。

この空間は大理石に似た石造りの白い室内で豪華な彫刻が刻まれた柱によって天井は支えられながら中世に造られた大聖堂というのが最も相応しいと言えるだろう。背中に薄ら寒さを感じ振り向けば巨大な壁画が全体に描かれていた。よく見れば中性的な人物が両手を広げ背景の自然をまるで自分のものだというように微笑んでいる。これが意味するのは自分達がいる地球で言うところの神という想像上の存在である。

勿論否定されれば違うと言えるだろうが人目で見てこれを理解できる人で1

0人中8人は彼と同じ答えを下せる。残りは投影者か国家等の擬人化と答える可能性はあるが。あまりの気味悪さに視線を戻せば周囲より高い位置に居ることが判る。他の判断材料がないか探してみればこの台座を囲む30人程の法衣を纏った集団がまるで神に祈るような姿勢を取っていた。その格好を端から見れば異世界転移ものの常套である宗教の衣装と酷似していた。つまり自分を含めた元クラスメイトたちは神によつて召喚されたのであると、目の前の集団の中から一人の人物が動くまでの間に結論を出していた。我々が考える神とは絶対的であり完璧なものである高位的存在と呼称される。しかし日本神話、ギリシャ神話、インド神話、エジプト神話等に代表される神話では神とされる人物らが人間たちが住まう世界に干渉しやりたい放題の限りを尽くしているため人間の負の面または同等以上の存在であるとして、一部の論者と知識人は認識している。つまりこの時点でハジメはこの世界に干渉している神とされる人物は人間の延長線上にいる存在と断定している。よつて彼は不完全な存在であるこの世界の神に対して怒りを抱いている。

目の前の法衣集団の中から一人が進み出た。推定七十代から八十代ほどの老人であった。だがそれにしては纏う覇気が異なり一瞬だけ見れば五十代相当だろうと間違える人がいるだろう。しかし顔の皺と老熟した眼によりそういう判断を下せる。その人物は定番のような豪華な衣裳を身に纏いそれでいて一見して美しいと言える鳥

帽子をかぶりそれでいて法王であると断言できた。そして件の人物は深みはあるが歳不相応な声音で開口一番に定型文を誦じた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

そう言つて、イシユタルと名乗つた老人は、好々爺然とした微笑を見せた。だがそれは却つてハジメの警戒心を弥が上にも高めるだけの笑顔だった。

場所は移り現在大広間とおぼしきところに彼らはいた。縦横が十メートル以上ありそんな長机がいくつも並んだ広間に彼らは各々椅子に座つた。ただこの場案内されるまで誰も騒がなかつたのは何故自分達が召喚されたのだという疑問とこれか

ら体験しうる恐怖と不安から身を守るために皆口を閉ざしていた。

全員が着席したのを見計らい奥からメイドが姿を現した。中世に存在した真正銘のメイドである。未婚者との場に相手がいらない既婚者の男はその姿をまじまじと見ていたがこの場に相手がいる既婚者は隣から肘鉄制裁を食らっていた。因みにハジメは飲み物を受け取っていたが警戒レベルを更に引き上げただけで最低限の挨拶をしただけに留まっていた。香織は社交辞令代わりの威圧を放ち八重樫を呆れさせていたが。

全員に飲み物が行き渡るのを確認するとイシユタルが話し始めた。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」

そう言うて始めたイシユタルの話は実にファンタジーでテンプレで、どうしようもないくらい勝手なものであった。

簡潔にまとめるとこの世界は人間族と魔人族と亜人族がこのトータスと呼称される世界を支配しておりこの内人間族と魔人族が数百年前より信奉する神の違いにより争っていた。特に魔人族は数的劣性を所持しているが個の力が強いため勢力均衡を維持していたという。だが最近個の均衡が崩れてきたという。その原因は魔人族が魔物と呼称される魔法を取り込んだ野生動物の亜種的存在の使役を始めたことである。

加えて種族によっては強力な魔法を使用できるため人間族のアドバンテージである数的優位を覆すことになる。つまり人間の完全敗北を意味していた。

「あなた方を召喚したのは“エヒト様”です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があつたのですよ。あなた方という“救い”を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、“エヒト様”の御意志の下、魔人族を打倒し我々人間族を救って頂きたい」

イシユタルはどこか恍惚とした表情を浮かべている。おそらく神託を聞いた時のことでも思っているのだろう。人間族は聖教教会という単一宗教しか存在せず、この人間族の内実に九割以上がこの宗教を信奉していると聞く。少なくとも人間である以上数多の考え方がありそれに準じた宗教や価値観の違いが存在する。戦前の日本でさえ神道と仏教を筆頭とした複数の宗教が存在していたのである。外国に目を向ければ最大宗教であるキリスト教でもいくつもの分派が存在していた。つまりこの時点で単一宗教のみを信奉するこの世界の異常さに吐き気を抱いていると上座の方で騒ぎ声が聞こえた。愛子教諭である。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようってことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずです！ あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

ぷりぷりと怒る愛子教諭。彼女は今年三十八歳になる社会科の教師で非常に人気がある。百五十センチ程の低身長に童顔、ウェーブのかったセミロングの髪を靡かせながら走り回る姿を見て印象に残る生徒は多い。既に結婚し二人の子供に恵まれてはいるものの、容姿によって幼く見えてしまいしばしば生徒から子供のよう扱いを受けることもある。それでも昔よりは威厳がある程度出ている（本人談）。

教皇に対して声高に叫ぶ様子を見て、あのとときと変わってないなーと和んでいるのが数人いたが次の言葉により凍りつく。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」  
場に静寂が満ちる。重く冷えた空気が全身に押しかかる。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!?! 喚べたのなら帰せるでしょう!?!」

愛子教諭が叫ぶ。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干



渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですか」

「そ、そんな……」

愛子教諭が脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。皆一様に押し黙りどうやってこの世界から還れるのかを模索し始めた。そのうちの数人はこの一端を担っていたイシユタルを睨む。この行為は至極当たり前のことであり琴線に触れたなど人によつては感じてしまうが、そもそも戦争に関係の無い人物を呼ぶだけ呼んでおいて丸投げされしかも還れる保証が現状不明では怒りの感情を持ってしまうのも致し方ないのである。加えて神が創つたであろう人間たちを信用せず異世界の間人という最高の不確定要素を投入するなどという蛮行は戦前、戦中の軍人でさえそんな大博打なんか打ちたくない。既に多数の旧クラスメイトたちは不信感と異常さを人により大小の差はあるが感じ取っていた。

方針さえも決まらずその上話し合いもなくまずは自分が助かる道を探すなか光輝が立ち上がりテーブルをバンツと叩いた。その音にビクツとなり注目する旧クラスメイト。光輝は全員の注目が集まったのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここにイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだつてどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実な

んだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？  
どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしません」

「俺達には大きな力があるんですね？　ここに來てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざつと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

ギユツと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。だがそれはあまりにも理想的で中身がない言葉だった。少なくとも戦争を体験しなくとも情報ぐらいは知っている。その上で発言しているのならば明らかに狂った人間であると断言できるが、彼の発言から考えると人を殺すことはあり得ない。絶対に還ることができない根拠がある。人を助け導くことはどちらにとつても好条件であり最良な関係を築くことができる。これらが最も近いものであると言えるだろう。現実を直視せず理想論を朗々と語りあまつさええようやく眼に見えるほどの希望を持たせる。既に大多数が三十

代に踏み入れているのに精神年齢があまりにも幼稚すぎる彼を見て、高校生まで彼を慕っていた者はこの時点で話にならない、参加させてはならない人物と断定。今まで慕っていたその熱は急速に冷めていったのだった。

## ステータスプレート

場は静まり返り各々がどうやって帰還できるかを模索するなか、現状として誰が発言してもすぐさま大きく燃え上がるため誰も彼も口を開かない。だがこの空気のみなかで重たい口を開いたのはハジメだった。

「イシユタルさん。どこかに盗聴される心配の無い部屋はありますか？」

「フム、それであるならば人払いでも……」

「いえ、イシユタルさんもです」

「私ですか。それはなんでまたそのようなことを？」

「僕たちはいきなり召喚されて戦争参加してくださいとつい先程言われました。だからと言ってすぐさま肯定の意を示せるほど柔軟ではありません。そのため戦争参加の無い方針を決定するための時間が欲しいのです」

「そうであるならば仕方ありません。確かにいきなり来ていただいて右も左も判らないにも関わらず参加を強制するのはあまりにも酷でありますからな。分かりました、案内いたしましたよう」

「有難う御座います」

イシユタルが席を起ちこの巨大な広間のなかで唯一の観音開きのドアに向かう。その他も少しづつ席を離れイシユタルの後ろを着いていく。体感にして数十分後、先程よりも小さな扉の前で立ち止まった。

「皆様が入ることができる広さの部屋ですとここが最大となります。これ以上小さくなる」と身動きが取れなくなります」

「ええ充分です。有難う御座います」

「既に人払いを済ませております。会議はご存分に。ああそれと時間はいつぐらいがよろしいですかな？」

「では二時間後でお願いできますか？」

「分かりました。後程従者を行かせましょう。ではこれにて」

「はい後程」

イシユタルが去り皆部屋に入り席に座る。ある程度のグループに別れつつ現在主導権を握っているハジメの方を向く。遠藤に頼み盗聴機の類いを調べさせてから漸く話始めた。ちなみにここまで天之河が騒がない理由はあの広間から出る直前に坂上から猿轡を咬まされた挙げ句両手足を縛り上げられ俵担ぎで運ばれたためである。現状は更に椅子に括り付けられているが。

「皆ここで口を閉じても何一つ変わらない。まずはここで戦争参加の有無を決めようと

思う。細かいことはあとで考えて、勿論彼らの戦争理由も。僕たちが現状手段で帰還できる方法は魔人族を倒し戦争を止めること、そしてエヒトと呼ばれる神様に頼むこと。これ以外にも手段があるならばそちらも参考程度に。それらを踏まえた上で方針を決めない限り僕たちが居た世界には還れない。還るなら早めの方がいいと思うんだ」

「それは間違つてはないんだがなにも判らない以上どうも出来ないだろ」

「ここでこうやつてもたついで時間を浪費するよりも幾分かましな論だぜ、彼奴よりも」  
「うん、最終的な結論はそこに行き着くよね。けど無条件に話を信じこんで戦争になった理由を知りもせずに参加するのは広義の意味での狂人に該当するよね」

「その部分は今は置かせてもらうね。じゃあ現時点でのことを決めようか。周りに流されずに自分で決めてね。戦争参加の人は挙手をして」

「ありがとう。では不参加の人は挙手をして」

「最後にまだ定まってる人は挙手をして」

「うん、これで決定だね」

賛成 11 反対 16 不明瞭 7

これが全てだった。参加不参加の自由は個人であるし、一人の決定が全体の意思ではないことは明白であった。

「賛成の人たちはひとまず訓練かな。たぶんこの人たちが場所を提供してくれると思

いたい。反対の人たちは情報収集を。特にこの世界の歴史と戦争の原因を調べて欲しい。その部分を知らないとなんのために戦争を行っているのか、根本的なものが揺らぎかねないからね。不明瞭の人たちはどっちについても構わないよ。僕たちには強要させる謂れはないからね」

そう締め括り細かなことの説明、情報の整理、生存率をあげる上で何が必要なのか等々、様々なものを議論しきつちり二時間後に来た従者に案内され広間に戻った一行はイシユタルに参加する人員などを報告。自分達の安全を確保するための宣誓書を取り付けまず第一の関門をクリアした。この後教会本部からの台座移動、ハイリヒ王国の中枢にいる人物の紹介、晩餐会が開かれるがこの部分は原作と変わらないのでオールカット。

翌日から訓練と座学が始まり全員に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。訓練の前にいきなり板状の物を渡され拍子抜けた顔をする一行にハイ

リヒ王国騎士団団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。何故団長が直接指導するのかと不思議そうな顔をする一行だったが理由を聞いて苦笑しながら納得した。体内的には勇者様一行で通っているため半端者が指導をしていざというときに頼りにならないければ国家の面目が潰れてしまうという結構生々しいことを笑い飛ばしながら話していたからである。メルド団長本人も、

「むしろ面倒な雑事を副長（副団長のこと）に押し付ける理由ができて助かった！」

と豪快に笑っていたくらいだから大丈夫であろうが、副長さんは大丈夫ではないためハジメは心の中で合掌した。

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

身分証明書にしてはデカすぎる。現代の生活様式に慣れたハジメは彼の性格だった話し方を特に気にしておらず全く的外れなことを思い浮かべていた。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。ステータスオープン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くな



よ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」  
「アーティファクト？」

アーティファクトという聞き慣れない単語に天之河が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

アーティファクト  
そんなもの流通させて大丈夫なのかこの世界。

学生時代に父親の手伝いをしていたためこの方面に対することは結構知っているものの、良くも悪くも社会に染まりなおかつ技術に対する保護が徹底的に強い職業に勤めているためそういうことに敏感になっっているハジメだった。

全員が針に指を刺しプレートに血を垂らすとプレートが光りステータスが表示された。



ば表示することが出来る。・ワイルドウィーゼルアメリカ空軍の敵防空網：地对空ミサイルの発見および制圧の任務を課される航空機の通称。この世界では武器を用いてサーチアンドDESTROYを行うための技能。なぜハジメがこの技能を持っているのかは後日語る。・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ゲームのステータスのように表示されてはいるがどう考えても元の<sup>地</sup>世界<sup>球</sup>由来の技能？になってはいるものの明らかに技術体系や戦術に使われる単語であって技能ではない。若干頬を引き攣らせていると横から声が掛かる。

「ハジメくん、どんな感じだった？」

「ハハハ……今ちよつと現実逃避して……」

「どういうこと？」

「これ見れば分かるよ」

ステータスプレートを渡し技能の欄を指差す。

「あー、成る程。けど私もそんな感じだったよ？」

「え」

そうやって香織はステータスプレートを見せた。

|||||

南雲香織 30歳 女 レベル：1

天職：治癒師 軍医

筋力：60

体力：70

耐性：40

敏捷：60

魔力：390

魔耐：300

技能：回復魔法・光魔法適性・魔力高速回復・応急処置病院や診察所で診察する前に保健医やその知識がある人間が行う怪我等への一時的な治療方法。この世界では軽傷者に対する一時的な回復魔法のこと。・高速縫術傷害部分の周辺を麻痺させ糸を用いて高速で縫うこと。・ダメージコントロール船舶で穴の空いた部分を応急で塞ぎ左右どちらかに傾いたのを一時的に水平に戻す作業方法のこと（ただし限度は存在する）。応急処置と似ているがこちらは動きに支障のある部分の怪我を直し対象のものを即座に

動かすことが出来る技能。・地形把握1度見て通った場所であれば最適な位置取りで駆けることが出来る技能。ただし現在は屋内限定。・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

確かにそういう感じで記載されている。一部は完全にこの世界由来の技能であることは明白にしても、ダメージコントロール・通称ダメコンはどうあがいても処置方法であって技能じゃない。プレートを見ていきながらハジメの顔から表情が消えたのは仕方なの無いことかもしれない。二人が見せあいをしている間に国庫の武器大放出だったり勇者の天職が現れたなどと歓声が上がったりしていたがハジメにはほとんど聞こえてはいなかった。ちなみに後で合流した八重樫のステータスプレートを見せてもらったときも同じ顔をしていたが。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

八重樫雫 30歳 女 レベル：1

天職：剣士 自衛官

筋力：70

体力：90

耐性：80

敏捷：120

魔力：60

魔耐：60

技能：剣術・縮地・先読・レンジャー徽章・格闘徽章・空挺徽章・射撃徽章・体力徽章・言語理解

|||||

|||||

天之河光輝 30歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：250

体力：250

耐性：250







## ゲームチェンジャー

ステータスプレートを公開してから二週間、ハジメは錬成方法の極限化を目指していた。何せ自分達がいた世界は科学技術が発達していた。ならばそれを使わない手はないのだが一歩間違えれば戦争の在り方を変え余計にこの世界に長く拘束される危険性も孕んでいた。その一つが今製作している物「銃」である。アメリカなどの所持が強く規制されていない国では簡単に手に入り3Dプリンターを使い設計図をインターネットから引つ張ってくれば製造でき、トイガンやモデルガンを改造すれば殺傷力のある代物が産み出せる。それが実戦で使用されたときに高い能力が発揮された。日本では長篠合戦が有名であろう。銃としての歴史は古いものの現代的なものであれば19世紀まで遡らなければならない。

簡単な説明はここまでであるが何故ハジメが銃の製造をしているかを簡潔に説明すればステータスプレートに載っていた技能が深く関係していた。ハジメの技能は悉く戦争向きのものであるがここ王国に存在する国宝級の武器では発動しないとい

う強大な欠点があった。つまり戦争では使い勝手が良いのにも関わらず魔法で発展したこの世界では遠距離攻撃が可能で携行できる武器は弓矢しかなく単発威力は高いものの速射・連射性が低い、またはその逆と両極端であり両方の技能を持つものがひとつもなかったということがあった。勿論商店や王国から支給される刀剣類を使って漫画やラノベで出てくるピットのような形で実験したものの数m飛ばしたらそのまま落下してしまう使う、武器の大きさや重さによって使える本数が増減する、投射時に脳に多大な負担が掛かるなど余りにも汎用性が悪すぎるといってさんざん結果に終わってしまった。最後はヤケクソ気味でそこら辺に転がっていた石を弾丸に模して技能を使用したら石が音速で射出されてしまったのである。ハジメはまだ気づいていないものの浮遊魔法か重力魔法で体を浮かせ飛び回れば完全に戦闘機としての運用になる。つまり戦闘機に必要な技術がそのまま技能として使えるという意味で自身が戦闘機であるということである。

そんなことは宇宙の彼方に放っておいて  
閑話休題

現在彼が製作しているのは構造が簡素で高い硬度を必要としない鉱石で大量生産が出来るものの威力・速射・連射性が低く有効射程が短い火縄銃である。何故現代

銃に大きく劣るしかも四世紀以上離れている火縄銃を生産しているのかという点と現代銃の場合構造やその仕組みが解つていても製造の知識は全くなく、特殊加工が必要であつたり部品数の多さから断念したのである。それに加えて毎日錬成の反復練習を行つているとはいえなかつた二週間で現代科学で造られたものをこの世界で製作するには時間が圧倒的に足りなかつた。もつと言えばそれに相応しい鉱石が大量に無かつたという側面はあるが。反面火縄銃の方は特殊加工技術は不必要であるが使用鉱石量が多すぎるといふ難点がある。しかしそれを補つてあまりある大量生産の易さと使える火薬量の大幅減少である。

そもそも錬成は天然物質、人工物質から自分で決めた加工物へと変化させる技能で、派生技能が多ければ多いほど加工自由度は増し一点物を製作できる利点があるが、反面精練されない限り不純物が混ざりあつたまま加工されその分、脆弱性が高く錬成のために費やす時間が膨大であるなど一概に良いとは言えず質が量産品と比べて低いという結果が存在している。人によつて物品の良し悪しが完全に分かれ一番ひどいのはその日暮らしが限界水準と言う悲惨なものとなる。

で、結局クソ長い説明でこの話の一部を埋めたのだが何が言いたいのかといふと

錬成技能の派生と技術の向上を同時進行して一人の戦闘員として運用上問題がないよ

う・錬・成・作・業・に・没・頭・し・て・い・る

だけである。

「ハジメくん、今どんな感じ？」

「丁度300挺造り終えたところだよ。弾丸を造るのに随分時間が掛かってね、今さっきだったんだ」

「やっぱり扱い辛い？」

「現代銃に慣れてるからね、先込め式だから装填に時間が掛かるけどその分別の銃で置き換えれるから充分リカバリーは可能だね」

「でも移動しながら射撃するには同時展開数が落ちちゃうし完全に置き砲台としての役割だよ」

「技能が技能だし、単発の火力が低くても面制圧能力はあるから活躍は出来るよ」

「進化手順はどんな感じで予定を組んでるの？」

「今は火縄銃だからこの次はフリントロック式、パークッションロック式、ボルトアクションと続いていって最終的にはセミオート・オートマッチクタイプの銃を製作するつもり」

「けどそれじゃ時間が…」

「うん時間が掛かるのはわかってる。けれど銃の特徴も知らずに現代銃を大量生産した

ら技術の習得や向上ができずに不格好な銃としての役目を果たせない物が大量にできてこの世界の軍事バランスが大きく崩れる。しかも僕たちは一刻も早く帰らなければならぬけれど、石橋を叩かずには渡って崩れて落ちてしまいました。じゃ今まで培ってきた努力を不意にした挙げ句こつちの世界に大きな迷惑が掛かる。そういうのは出来るだけ避けたいんだ」

「……難しいんだね軍事バランスの均衡って……」

「今、列強と呼ばれている日本、アメリカ、イギリス、中国、ロシア、フランス、ドイツ。加えてインド、イスラエル、イラン、UAE、シンガポール、ブラジル、エジプト……。地域周辺に大なり小なり影響を与える国々はそれ相応の戦力を持たなければ平和が崩れてしまう。」

S i v i s . p a c e m , . p a r a . b e l l u m .

汝平和を欲さば、戦への備えをせよ

自分の身は自分で護らなきや、今の社会の仕組みが絶対的に安全かと言われると違うと言えるからね」

「そのための訓練、でしょ?」

「そういって」と